



## 心と技を伝える

近年「ものづくりの復権」が叫ばれ、国、企業レベルでさまざまな取り組みがされている。特に戦後の高度成長を支えてきた世代の大量退場に伴う、技術技能の伝承については、大きな問題となっている。

労働政策研究・研修機構の調査によると、技能継承に危惧を抱いている企業の割合は、全体の3割にも達するという。

特に製造業における技術・技能の継承問題が中心と考えられているが、当社の属する建設業においては、市場の縮小傾向や、信用失墜問題等先行きの不透明さもあって、人材確保の問題と併せて、大きな問題となっている。

技術・技能の継承について、各企業の取り組みが各社各様にされている。当社においても創業60年の歴史において、技術・技能の継承面の危機があった。そのとき、先輩から後輩へと、満足とはいえないまでも、比較的スムーズに継承できたのは、教育機関における教育が50年にわたって止まることなく行われていることにあったと思う。

その間に、私たちがかわる「電気工事」の分野も変化してきている。いわゆる「電気屋」と一括りにいえないほど設備技術の幅が広がり、当社の事業内容も「電気工事」にとどまらず、建造物の躯体工事を除いて、設備全般の工事を扱っている。特に近年は、情報ネットワーク技術の進展でネットワーク、一般電気工事の分野においても技術・技能が大きく変わってきた。社会のニーズもスピード、安全、品質、コスト、省エネと変化し、それに対応して技術も発達してきた。これからの時代は少子高齢化社会、地球環境への配慮など、そうした技術の変化に対応した技術者、技能者を養成し、人材を育てることが大きな使命となっている。

教育機関で行う教育内容は、事業内容の変化に応じて変わってきているが、基本に「心を磨き、技を

練り、身体を鍛える」という三位一体の教育を置き、繰り返し教育により「態度堂々、動作きびきび、言語はきはき」のできる若者を育てる教育は、創設以来変わらず続いている。長い歴史の中で、幾多の転換点はあった。いずれのときも、教育理念は変えないという頑固なまでの強い決意で今日まで続いている。

戦後60年を経て、家庭での状況、学校教育など人間形成にいたる環境が大きく変わり、入社してくる若者の考え方も変化している。「～になりたい」と明確な目標を持たない若者をその気にさせ、社風になじみ、会社に役だつ人材に育てるには、教育理念に基づいた繰り返し教育と、厳しさのなかにも愛情と熱意を持った指導が大切である。

昨年、その教育機関内に「心と技の伝承館」を開設した。写真や資材・工具の実物展示により、当社技術の変遷を紹介するコーナーや、教育機関の理念、歴史、特徴などを紹介している。単なる技能や技術の系譜を後世に伝えるだけでなく、創業60年の歴史に生きた人たちの苦闘やドラマ、喜びや情熱、そのときどどのように行動したのかなど、先人達の教訓やエピソードを伝承館において体感し、精神的資産や社風を伝承する拠点として活用している。

CSR（企業の社会的責任）が重要視されるなか、変化の激しい時代にも揺るがない「心と技」を兼ね備え、企業の発展、ひいては国家に貢献する人材を育てることが、今こそ必要である。

こだま すみと

略歴	1971年	近畿電気工事入社 近畿電気工事高等技能訓練校入校
	1973年	同校卒業
	1980年	職業訓練指導員
	1981年～91年	教科・生活指導
	2005年12月	現職